肉質重視型牛肉生産システムの必要性

黒肥地一郎先生講演　平成３年２月27日

伊　東　繁　丸

１）牛肉輸入自由化を迎えた牛肉生産のあり方

自由化より国内牛肉生産に大きな打撃が出るであろうと心配されている。今のところ予想外に輸入牛肉の消費は伸びないという事であるが，自由化になると少なからず打撃があると考えられる。日本人の嗜好に答えるべく，良質で安全な肉作りを追求する必要がある。短期的展望からは，良質肉であれば対応出来よう。従って，輸入牛肉の肉質と同等の牛肉を生産していては，どうしようもないということである。肉質等級から見てホルスタイン種でも３以上のものをコンスタントに作る技術が要求される。また，コスト低減を同時に追求する必要があり，それには，牛の一生の各過程でコスト低減が必要となる。

２）牛肉生産の現状

消費者が求める牛肉とは何か？質が良く，鮮度が高く安定した供給が出来るということである。現在，黒毛和種では素牛が高く，どうしてもＡ５を目標にしないと採算がとれない。群管理条件下で個体管理レベルの技術を追求することが課題になっている。その点，入来牧場では一貫体系ということで，育成時の管理を骨作りの時期として重点的に位置付けることが出来ると思う。肥育期間の中では，13ヵ月までの期間が内臓を作る意味で非常に重要である。一般には子牛市場出荷迄によけいな脂肪を付けてしまいがちである。市場出荷子牛ではこの点の改善が必要である。

３）システムの目標と必要性

肥育素牛の条件の一つは，粗飼料を充分に食った牛であることである。肥育前期で作る胃袋を子牛時代から充分に作っておくこと。この点からみれば，肥育牛の出来不出来は繁殖サイドにかかっているともいえる。従って，牧場における一貫体系ではこの点を最大に重視すべきである。牛の能力を充分生かすには血統と管理であるが，管理はその人の心であり目であり実践力である。牛をよく見て牛と話が出来ると，牛はそれに答えてくれる。血統がよく食い込む牛は長く飼ってもよいが，そうでない牛は長く飼うことは得策ではない。

４）システムの特徴

肥育段階に合った濃度の餌をどの程度食わせるか，肥育末期では高エネルギーの餌を充分に与えるかがポイントである。給与標準は最低限度であり，標準どうりの給与ではどうしても不足する牛が出る。20％増あるいはそれより増やすこともありうる。その場合，前期６ヵ月は粗飼料を増加させ，中期６ヵ月は粗飼料と濃厚飼料を１対１の割合で増加させる，後期６ヵ月は配合飼料を増加させ粗飼料は増やさないことである。

5）まとめ

優秀農家の共通点

ア）いかに予定どうりに食わせるかに努力している

イ）ストレス解消に最善を尽くしている

ウ）牛群全体がおとなしく，横臥している

エ）牛床が汚れていない

オ）床面積が充分にある

カ）ミネラルを充分に給与して牛を健康にしている

キ）体重測定結果を記帳し，管理成果を評価・改善に役立てている

以上の点を牧場での試験研究の中でも実行することである